

小学校だより

2026年
3学期号

2026.3.14

Vol.
161

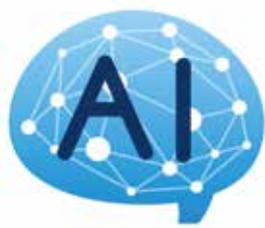
生成AIと向き合う学校教育

校長 相川 保敏

近年、文章や画像、音声などを自動的に生み出す「生成AI」が、急速に社会へ浸透してきました。私たちが想像する以上の速さで技術は進展し、子どもたちが成長するこれからの社会において、生成AIは避けて通ることのできない存在となりつつあります。こうした状況の中、学校教育はこの新しい技術とどのように向き合うべきかが、いま改めて問われています。

文部科学省は、生成AIの教育的影響について、社会の動向を見極めながら慎重に検討を重ねてきています。令和五年当初に示された考え方は、生成AIの利便性の一方で、思考力や表現力の育成への影響、誤情報や偏りを含む可能性などが指摘され、特に小学校段階では「慎重な取り扱い」が基本とされました。そもそもChatGPT(OpenAI)をはじめとする主要AIサービスの年齢制限は十三歳以上となっており、小学生は基本利用不可となっていることも影響しています。

しかし、その後生成AIは社会の中で急速に普及し、私たちの生活や仕事の在り方その



ものを変えつつあります。令和六年十二月の最新ガイドラインでは、生成AIを単に「危険なもの」として遠ざけるのではなく、正しく理解し、適切に活用する力を育てていくことが、学校教育の重要な役割であるとの立場を明確にしています。そして「リスクを理解した上で、具体的な場面に応じて積極的に活用していく」というように、より実践的な段階へと進んでいます。生成AIの時代において真に求められるのは、技術を「使えるかどうか」ではなく、技術とどう距離を取り、どう付き合いかを判断できる力です。情報を「のみにせず」、「これは本当」「正しいのか」、「別の見方はないのか」と問い直す姿勢、そして自らの頭で考え、責任をもって選択する態度は、これからの社会を生きる上で欠かすことのできない力と言えます。

本校でもこの考え方を大切にしながら、小学生の発達段階を考慮した生成AIとの向き合わせ方を検討しています。子ども自身が自由に用いるのではなく、教員が仕組みや限界を示しながら指導していくスタイルを取り、考えを広げるための一つの視点として活用したり、複数の意見を比較しながら吟味したりするなど、「子どもが自ら考

え、選び、深めていく学び」を支える補助的な活用を進めています。例えば、六年生のプロジェクト学習で「制服の見直し」を検討しているチームでは、全校アンケートを自分たちで考えてまとめたのちに、不足している項目や問い方がわからない項目を教員とともに生成AIを活用して吟味する活動を行いました。このように、考えをまとめた段階で生成AIの考えと比較し、足りない視点を見つけ議論を深めるというような学習が考えられます。また、情報の真偽を見極めるために生成AIの出した誤りを含む内容を取り上げ、その性質や限界に気付せるような学習を行うことも考えられます。

今後も生成AIを活用する学習にあたっては、情報活用リテラシー、情報モラルの育成も必要となってきます。例えば、「著作権の侵害につながるような使い方をしない」、「生成物をそのまま自分の成果物として使用しない」、「プロンプト(ユーザーが入力する指示、命令、質問などに氏名や写真等の個人情報を入力しない)など、生成AIとの付き合い方も併せて学ばせていくことが必要となってくるわけです。

これからますます生成AIの活用が広がっていく中で、子どもたちは学校だけでなくいたるところで生成AIを活用する場面に遭遇すると思われる。ご家庭でもそうした折には、「個人情報を入力しない」、「そのまま成果物として提出しない」といった活用上のルール、「著作権」への配慮や「利用規約の遵守」といったことなど、ご配慮いただけるとありがたいです。ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

特集

在校生へのメッセージ

委員会報告

P.4

学期の行事

P.5

学年トピックス

P.6

P.17

PTA

P.18

P.19

三学期の思い出

P.20

